

[第一回日本言語文化学会発表要旨]

話しかけ行動と場面依存性
— 言語行動の実態調査<中間報告> —

柏崎 秀子
(1990, 12, 15発表)

談話レベルの文法がいわれるようになり、ひとまとまりの言語表現がどのような構造を持ち、どのように機能しているのか、日本語教育への活用に向けて実際のコミュニケーション行動に関する基礎的研究が求められている。今回は、談話を構成する最少のまとまり(ディスコース・ユニット)として「話しかけ行動」を取り上げ、実際の会話の中でディスコース・ユニットがどのように構成されているか、日本語母語話者の場合について実証的に検討した中間報告である。

さらに、伝えるべき内容について、どのような表現が使われているかという点も考えることとする。機能による言語表現の指導の際、幾つかの表現が教師から提示されるが、実際の会話ではどのような表現が多く用いられているかを把握した上で指導することが望ましい、と思うからである。

[調査方法]

大学の助手室で話された会話をテープレコーダーに録音した。その際、話しかけの位置や非言語行動も記録するよう努めた。助手に対する依頼や許可の表現を中心にみてみることにする。

[調査結果と考察]

今回分析の対象としたのは80例である。ディスコース・ユニットは、これから話を始めることを示す「話の場づくり要素」と、話そうとする内容の暗示である「話題づくり要素」、そして内容部分で構成されていた。

まず、内容に入る前段階についてみると、場づくり要素70%、話題づくり要素40%の発現率であった。いずれもない場合が7.8%であることから、92.2%の事例で少なくともいずれかの要素が話しかける際に内容に先立って発せられていた。場づくりの多くは「あのう」で、相手の名前・立場名を呼ぶこともあった。話題づくりでは「すみません(が)」がほとんどであった。話しかける時は、突然、内容を述べ始めるのではなく、相手を話の場に引き込むための働きかけを行ってから内容に進むとい

う特徴が見られた。これがないと、唐突な印象を受けたり、話がうまく聞き取れなかったりするのではないか。日本語教育の際にも、コミュニケーションが円滑にできるように、この点の指導が必要となろう。

次に、内容部分の表現にどのような種類が使われているかを言語心理学の枠組みを参考にまとめた。

| | (のべ) | (例) |
|---------------|----------|------------------|
| 1. 直接的要求(直要) | —— 6.2% | 「本を貸してください」 |
| 2. 協力 | —— 12.5% | 「かぎを貸していただけませんか」 |
| 3. 話し手の状況(S状) | —— 23.8% | 「紙がつまっちゃったんですが」 |
| 4. 話し手の目標(S目) | —— 5.0% | 「レジュメの印刷したいんですが」 |
| 5. 聞き手の状況(H状) | —— 8.8% | 「かぎおもちですか」 |
| 一般的な状況(般状) | —— 18.8% | 「へやあいてますか」 |
| 6. 許可 | —— 3.8% | 「コピーをしてもいいですか」 |
| 7. 主題のみ(主題) | —— 23.8% | 「かぎは(を)……」 |
| 8. その他 | —— 3.8% | |

S状が多く、「書類もってきたんですけど」「紙がつまっちゃったんですが」のような表現が用いられていた。同程度に主題のみの場合が多く、「かぎなんですけど」「コピーは…」「これ…」などであった。協力を求める「～ていただけませんか」という表現はそれに次いでいる。このことから、完全な依頼や許可の文型を用いずに、間接的に表現したり、聞き手に内容を察してもらう場合が多いといえよう。

また、主題だけや「これ・それ」などの指示語であらわされる場合がみられ、話し手が何を欲しているのか何の意味なのか、発話の場面に依存して規定されていた。場面状況を正しく把握することが会話において求められているといえよう。それを裏付ける興味深い事例が数例みられた。つまり、話し手が「あのう」と場づくりしただけでまだ内容を述べていないのに、聞き手がたとえば「かぎですか」と察して先に問いかけてしまう、という場合である。察しということに関連して、何をどこまで明示化するのか、逆に、しないのかが問題になるところであろう。

今後の課題として、外国人日本語学習者の話しかけ行動はどうなっているのか、日本語母語話者の場合との相違点を比較検討中である。

*なお、日本語学習者との比較を交えた全体的検討は平成3年度日本語教育学会春季大会の発表で報告する。